

★ 今週の聖句

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」	ルカによる福音書 9:23
--	---------------

★ ねらい

教会は、信仰によって結ばれた愛の交わりです。神さまは、私たちを無条件に受け入れて、愛してくださっています。キリスト御自身が私たちを信じてくださっているのです。だから私たちは、キリストを信じ、自分自身を信じ、他者を信じることができるのです。

★ 説教作成のヒント

対人関係には、大別すると二つあります。一つは、他者に依存せず、たえず自分の感情を押さえて、自分の問題を表面にあらわすことのない、毅然たる態度です。これは、自分の力をたのみ、どんな危険や問題にも正面から立ち向かう態度です。

もう一つは、自分の欠点を認め、他者の援助をあおぐ謙遜な態度です。この場合には、私たちは尊敬と思いやりによって結ばれ、互いに協力し合おうとしているわけです。だれでも、お互いに信頼できるという気持ちになれば、それまで相手との間にはりめぐらしていた防衛を取り外して、心を開いて語り合い、あるがままの自分の姿で相手に接することができるようになります。

★ 豆知識

K. ホーナイは、自己には三つある、と言っています。第一は、現実自己、第二は、理想自己、第三は、真の自己です。第一の現実自己とは、人生経験を経て出来上がった自己であり、人が見て、すぐに分かる自己です。第二の理想自己とは、こうなりたいという自己です。しかし私たちには、自分の理想という眼鏡を通して、自己を見る傾向があります。そのために、理想自己と現実自己とを混同してしまうことがあります。以上の二つの自己に対して、第三の真の自己とは、人格の中に隠れている可能性のことです。失敗や、成長への障害が取り除かれて、生命の可能性のすべてが開花したときの自己が、真の自己です。

★ 説教

私たちは、自分の力だけを頼りにして、どんな危険や問題にも正面から立ち向かっているでしょうか。それとも、自分の欠点を認めて、他の人に助けを求めているでしょうか。

赤ちゃんもお年寄りも、ひとに助けてもらわなければ、生きていけません。おとなは、一人で生きていくように見えます。けれどもほんとうは、おとなも、ひとに助けてもらって生きているのです。自分一人だけで頑張る人は、疲れてしまいます。

だれでも、お互いに信頼できるときには、心を開いて語り合い、あるがままの自分で、相手に接することができるようになります。そして、相手の言葉に、すなおに耳を傾けることができるようになります。互いに分かち合おうという気持ちが生まれてきて、はじめて自分の問題をうちあげ、相手に対する思いやりを示すことができるのだ、と思います。私たちは、いつもだれかと一緒に生活することで、心と体の健康を保っているのです。

さてイエス様は、こう言われました。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(ルカ 9:23)。ここで捨てるように求められているのは、いったいどのような「自分」なのでしょう。

イエス様が「自分を捨てなさい」と言われたときの「自分」は、人に助けてもらおうとしない「自分」、自分の力だけで生きていけると思っている「自分」です。「自分の十字架を背負う」ということは、自分の欠点を認めて、他の人に助けを求めることができるようになることです。

イエス様は、私たちを信じて、私たちの欠点も受け入れ、愛してくださっています。だから、私たちがイエス様を信じて、神さまに仕えるために、頑張ることができるのです。

ドロシー・ロー・ノルトは、一人の男の子のことを紹介しています。十二歳のブルースは、近所のお店によく買物に行きます。じつは、他の子どもたちは、時々この店で万引きをしていました。ある日、店に入ったブルースは、どうしてもお菓子が欲しくなりました。しかし、お母さんに頼まれた買物の分しかお金を持っていません。ブルースは迷いました。

けれども、ブルースは万引きをしませんでした。それは、万引きをするなんて、そんな自分は許せなかったからです。親から信頼されていたブルースには、自分を信じる心が育っていたので、誘惑に負けることはありませんでした。

神さまは、私たちを受け入れて、愛してくださっています。イエス様が私たちを信じてくださっているのです。だから私たちは、自分を信じることができるし、他の人を信じて、助けを求めることができるのです。私たちは、だれかと深く結ばれることで、心と体の健康を保っているのです。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか” (日キ版) より

30番

79番 (改訂版)

やってみよう

その①

二人で背中合わせになって、5分間ほど、相手の背中からぬくもりを感じてみましょう。黙って目を閉じると、相手の気持ちを味わいやすくなります。

その②

十字架をつくろう

〈用意するもの〉

割りばし・輪ゴム・紙粘土・ビーズ、おはじきなど (翌週、絵の具・ラッカーなど)

はしをふたつに割り、片方を適当な長さに切って輪ゴムでとめて十字架を作ります。

これを芯にして紙粘土で肉づけしてビーズなどで飾ります。

色塗り、ラッカー仕上げは翌週がよいでしょう。

話してみよう

その①

- ・ 私たちは、自分の力だけを頼りにして、どんな危険や問題にも正面から立ち向かっているでしょうか。それとも、自分の欠点を認めて、他の人に助けを求めているでしょうか。
- ・ イエス様が「自分を捨てなさい」と言われたときの「自分」は、いったいどのような「自分」なのでしょうか。
- ・ 二人で背中合わせになって、相手の背中から、どんな気持ちを感じましたか。

その②

- ・ 今日の聖書箇所では、ペトロが自分にとってのイエス様はどういう存在かということをお話しています。あなたにとって、神様やイエス様はどういう存在ですか？

★ 暗唱聖句

「あなたは行って、神の国を言い広めなさい」

ルカによる福音書 9章60節

★ ねらい

イエス様は私たちに、「わたしに従いなさい」と言われます。じつは、この言葉は、私たちに慰める言葉なのです。なぜなら、イエス様は私たちに、こう話しかけてくださるからです。「安心しなさい。必ず道がある。あなたは自分の人生を、一人で歩いているのではない。たとえ一人で苦しんでいるように思うときでも、必ず神さまがあなたと一緒に歩いてくださっている」と。

★ 説教作成のヒント

河合隼雄氏は、「問題を解決するためのよい方法というのは、世の中にはない」と言っています。「よい方法」というのは脇道なのです。しかし、脇道にそれるのではなく、まっすぐな道に行くことが大切なのです。なぜなら、まっすぐ歩かないと、問題は解決しないからです。イエス様はこう言われるのです。「このまっすぐな道を行きなさい。ただし、私も一緒に行きますから」と。

★ 豆知識

通常、「国」と訳されるギリシア語のバシレイアは、「王として支配する」という動詞から作られた名詞であり、「支配」を意味します。ですから、「神の国」は「神の支配」です。神はこの世界を支配されており、被造物を生かす神の働きが「神の支配」なのです。

確かに、今を生きることは、決して楽なことではありません。けれども、いつまでも過去の生き方に縛られていては、今を生きることはできません。だからイエス様は、「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」と言われたのです。過去に別れを告げて、未来に向かって進んで行くとき、私たちの命は輝くのではないのでしょうか。

★ 説教

今日の福音書には、3人の人物が登場します。一番目の人は、イエス様にこう言います。「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と。イエス様は答えて、言われました。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子〔私〕には枕する所もない」。

この世界には、イエス様の留まる家がありません。しかし、一番目の人には家があり、家族があるのです。ところが彼は、家族と向き合い、一緒に生きるのがつらいので、家から逃げ出す言い訳に、イエス様を利用しているのだ、と思います。だから、イエス様は彼に、「わたしに従いなさい」と言われなかったのです。

そしてイエス様は別の人に、「わたしに従いなさい」と言われました。しかし、二番目の人は、イエス様に答えて、言いました。「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」。そこでイエス様は彼に、こう言われました。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい」。

二番目の人は、お父さんとけんかしていたのかもしれませんが。お父さんと仲直りする前に、お父

さんが亡くなってしまいました。だから彼は、お葬式をして、天国にいるお父さんと仲直りするまでは、イエス様の命令に従うことができないのです。しかし、過去を振り返るだけではなくて、未来に向かって進んでいくとき、私たちの人生は輝くのではないのでしょうか。

三番目の人は、イエス様にこう言いました。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください」。イエス様は彼に答えて、言われました。「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」。

三番目の人は、家族を愛していたために、イエス様の命令に従うことができないのです。しかし、イエス様に従う人々は、家族を自分のものだと考えることから自由になり、かえって家族一人ひとりをほんとうに愛することができるようになるのです。

「家族と向き合い、一緒に生きることは、どういうことか」。「なぜ私は、お父さんを嫌いなのか」。「なぜ家族を自分のものだと考えることから、私は自由になれないのか」。このような問題と向き合うのは、大変苦しいことです。しかし、逃げ出さないで、問題と向き合わないと、問題は解決しません。

イエス様は私たちに、「わたしに従いなさい」と言われます。じつは、この言葉は、私たちを慰める言葉なのです。私たちは、さまざまな問題を抱えて、思い悩みます。そのような私たちに、イエス様は話しかけてくださるのです。「安心しなさい。必ず道がある。あなたは自分の人生を、一人で歩いているのではない。たとえ一人で苦しんでいるように思うときでも、必ず神さまがあなたと一緒に歩いてくださっている」と。

私たちが、自分の人生の道を歩いていくことができるのは、神さまの働きによるのです。イエス様が、私たちと一緒に歩いてくださっているから、安心なのです。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

36番

120番（改訂版）

やってみよう

その①

目を閉じて、自分がひどく痛い思いをしているとき、「だいじょうぶ、痛くないよ」と言われたら、どんな気持ちになるかを、味わってみてください。また、どんな言葉をかけられたらうれしいか、探してみてください。

その②

- A. 前週に十字架を作った場合は、色塗りをしましょう。
乾かす間、下記Bのリスト作りはいかがでしょうか。
塗った絵の具がしっかり乾いたら、ラッカー仕上げをします。
その際は必ず換気の良い場所で、大人が行ってください。
- B 神さまを信じて毎日を過ごすことがどんなにステキなことか、
あなたの大切なひとにもお知らせできたらいいですね！
教会に誘いたい3人（ともだち、家族・・・）のリストを作り、持ち帰って見えるところに貼りま
しょう。そしてその大切な方たちが神さまと出会えますように、とお祈りしましょう。

話してみよう

その①

- ・ イエス様は私たちに、「わたしに従いなさい」と言われます。どうすれば、イエス様に従うことができるでしょうか。
- ・ 私たちが苦しいとき、神さまはどこにおられるのでしょうか。
- ・ 自分がひどく痛い思いをしているとき、どんな言葉をかけられたらうれしいか、話し合みましょう。
- ・

その②

学校の友達や近所の友達に、教会や神様のことを話したことはありますか？

神様を歓迎するということはどういうことでしょうか？ どうすれば、私たちは神様を歓迎する準備が出来るとおもいますか？

★今週の聖句

「行って、あなたも同じようにしなさい」

ルカによる福音書 10:37

★ ねらい

律法学者はイエス様に、「わたしの隣人とはだれですか」と問いました。この「隣人」は、律法学者が愛すべき対象としての隣人です。しかしイエス様は律法学者に、「良きサマリア人」のたとえを話した後、「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と、お尋ねになりました。「その人を助けた人です」と、律法学者は答えました。この「隣人」は、愛される対象ではなく、愛する主体としての隣人です。

★ 説教作成のヒント

オリゲネスは、「サマリア人」をキリストと解釈して、次のように述べています。「この『サマリア人』はわれわれの罪を担い、われわれのために苦しみ、半死の人を運び、宿屋、すなわち教会に運び込む。この教会はすべての人を受け入れ、その援助を誰に対しても拒むことはなかった」。

★ 豆知識

V. E. フランクルは、次のように述べています。「人は何ものかのため、誰かのため、すなわち大義のため、友人のため、神のために、自分を失う地点に達してはじめて、真の自分を発見するのである」。

このように自分を超越して、神に、他者に向かっていくところに、フランクルは人間の本質を見出すのです。「人間の本質には、あるものに向けられているということが属している。……人間は自分自身を観察し、自分自身を鏡に写すためだけに存在しているのではない。自分を引き渡し、自分を放棄し、認識しつつかつ愛しつつ自己を捧げるために、人間は存在するのである」。

★ 説教

イエス様は、「良いサマリア人」のたとえをお話になりました。そこには、一人のユダヤ人の旅人が登場します。彼は、エルサレムからエリコに向かう途中、三つの出会いを経験しました。一番目は「追いはぎ」、二番目は「祭司・レビ人」、三番目は「サマリア人」です。

旅人が最初に出会ったのは、追いはぎでした。追いはぎは旅人を襲い、服をはぎ取り、殴りつけて立ち去りました。旅人は、道端に倒れて、苦しんでいました。

次に、そこへエルサレム神殿で神さまに仕えている祭司と、祭司を手伝うレビ人がやって来ました。祭司は、神殿では「神を愛し、人を愛せよ」と教えていたはずですが、しかし、道端に倒れている旅人を見ると、二人とも道の向こう側を通って行ったのです。この祭司は、エリコの町でその日、お話をするために急いでいたのかもしれませんが。しかし祭司は、その日の集まりで、愛について話す予定だったのです。

最後に、あるサマリア人がやって来ました。サマリア人は、ユダヤ人から差別されていたので、彼がユダヤ人を助けることは、まずあり得ないことでした。ところがこのサマリア人は、その旅人

を憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱しました。そして次の日、銀貨二枚を宿屋の主人に渡して、言いました。「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います」。

今日の福音書には、「隣人」という言葉が、はじめと終わりに出てきます。はじめに、律法学者はイエス様に、「わたしの隣人とはだれですか」と質問しました。この「隣人」は、律法学者が愛さなければならない相手のことです。

しかしイエス様は律法学者に、「良いサマリア人」のたとえを話した後、「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と、お尋ねになりました。「その人を助けた人です」と、律法学者は答えました。この「隣人」は、追いはぎに襲われた人を愛した人のことです。

律法学者は、自分が隣人を愛することをまず考えているのです。それに対してイエス様は、隣人とは自分を愛してくれる人だ、と教えてくださっているのです。

オリゲネスという学者は、次のように言っています。この「良いサマリア人」は、道の向こう側を歩いて行く私たちに代わって、追いはぎに襲われた人を運び、宿屋に連れて行きました。「良いサマリア人」はイエス様です。そして、宿屋は教会です。教会は、イエス様が連れてきた人を受け入れ、助ける場所なのです。

私たちの隣人となってくださったイエス様は、こう言われています。「行って、あなたも同じようにしなさい」。イエス様が私たちを愛し、私たちを教会に運び込んでくださったのです。だから私たちも、イエス様にならって、神さまのために、他の人を教会へと招くのです。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

61番

130番（改訂版）

やってみよう

その①

だれかが、「友だちにからかわれていやだった」と言ったとき、なんて言ったらいいでしょうか。

- ①「何か嫌われることを、きみもしなかったかい」
- ②「へいきさ、そんなことどうってことない」
- ③「そんなことでいじけていたら、生きていけないよ」
- ④「そうか、からかわれていやだったんだ」
- ⑤「くやしかったんだね」

その②

- ・今日の聖書に出てきた登場人物を子どもたちに聞く。(レビ人、祭司、サマリア人他)
- ・どんな立場の人でどんな仕事をしていたのでしょうか?
レビ人 →人々から尊敬され、律法を守る正しい人。ユダヤ人と仲良し。
祭司 →神さまに仕える仕事をしていた。
サマリア人→ユダヤ人と昔から仲良くなかった。
- ・今日の聖書を読んで、即席劇をしてみよう。
※時間があれば、いろんな役を交代して体験してみましょう。
- ・劇をした後、自分が演じた役の人物がどんな気持ちだったかを紙に書いて、発表しましょう。

話してみよ

その①

- ・ 追いはぎに襲われた人を見たら、あなたならどうしますか。
- ・ 通り過ぎた祭司やレビ人の気持ちを考えてみましょう。
- ・ 良いサマリア人はだれですか。

その②

誰かを助けるということは、そんなに簡単なことではないとおもうかもしれませんが、小さなことから考えてみると、私たちに出来ることは結構たくさんあります。

自分が今までやってきた、誰かを助けたというエピソードを話してください。

逆に、誰かに助けもらったというエピソードはありますか？

もし、自分が道路で怪我をしている人を見つけたら、あなたは祭司やレビ人のように振る舞いますか？それともサマリア人のように振る舞いますか？

★今週の聖句

「しかし、必要なことはただ一つだけである」

ルカによる福音書 10:42

★ ねらい

イエス様は、「必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ」と言われました。マリアは、何もせずに、イエス様の足もとに座って、その話に聞き入っていました。これだけが、多くのことに思い悩んでいる私たちに、必要なことなのです。なぜなら、その時、私たちは、あるがままの自分になることができるからです。

★ 説教作成のヒント

現代人の自分喪失のプロセスを、諸富祥彦氏は次のように説明しています。人の目や世間体、学歴や収入を気にしているうちに、自分は、自分と同じくらいの能力を持った他の人と、交換可能な存在でしかないように、思えてくる。たまに、本当に言いたいことを言って、本当の自分を出したと思ったら、無視されたり嫌われたりしてしまう。だから人は、知らず知らずのうちに、他の人や世間から受け入れられやすい仮面を着けて、演技をするようになる。そして、そんなことをくり返しているうちに、本当の自分が分からなくなってしまいます。けれどもそれでは、生きていてもつまらないので、輝く自分になろうと、仕事を頑張ったり、色々と努力したりする。けれども、どんなに努力しても、上には上がいるから、休むことができない。そして、疲れ果ててしまう。

私たちは一人になって、「私はこんなふうでいいのか」、「こんなふうに生きていって、死ぬときに後悔しない生き方ができるのか」と、ふと立ち止まって、自分の心の声に、耳を傾けることが必要なのだ、と思います。

★ 豆知識

C. R. ロジャーズによれば、自分を取り戻し、自分らしく生きるためには、自分自身を受け入れて、自分自身にやさしく耳を傾けることが大切です。そして、ロジャーズ心理学の特徴は、人が自分自身を受け入れて、自分の心の声に耳を傾けて、真に自分自身になっていくことは、他の誰かから無条件に受け入れてもらえるような、共感的関係においてはじめて可能になる、と考えるところにあります。

教会とは、神さまに無条件に受け入れられていることを信じる信仰共同体です。神の愛を信じる時、私たちは自分自身になれるのだ、と思います。

★ 説教

今日の福音書には、マルタとマリアの物語が記されています。イエス様は、ある村にお入りになりました。するとマルタが、イエス様を家に迎え入れました。マルタにはマリアという姉妹がいました。マリアは、イエス様の足もとに座って、イエス様の話に聞き入っていました。それに対してマルタは、いろいろのもてなしのために、働いていました。

怒ったマルタは、イエス様のそばに近寄って、こう言いました。「主よ、わたしの姉妹はわたしだ

けにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」。

イエス様は答えて、こう言われました。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」。

私たちは、一人で思い悩んでいるとき、心の中でいろいろな声が聞こえています。例えば、マルタの場合には、「イエス様をもてなすために、もっとこうすべきだ」、「もっと働け」というような声が聞こえていたわけです。だから、イエス様はマルタにこう言われたのです。「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している」と。

そしてイエス様は、「必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ」と言われました。マリアは、何もせずに、イエス様の足もとに座って、その話に聞き入っていました。これだけが、今のマルタに必要なことだったのです。なぜなら、イエス様のそばにただいて、マルタもマリアも、何の気がねもなく、自分自身でいることができるからです。

それでは、イエス様の足もとに座って、その話に聞き入っていると、いったい何が起るのでしょうか。イエス様のそばにいたうちに、それまで自分の心を支配していた声から、いつの間にか解放されていることに気づきます。

すると、それに続いて、心の奥から声が聞こえてきます。「本当は、私はこういうことを感じていたんだ」、「本当は、私はこうすべきだったんだ」という声が、心の奥から聞こえるようになります。私たちは、人の目を気にしなくていいのです。

だから私たちは、人の目を気にして、演技しなくていいのです。ロジャーズは、次のように言っています。

「私が自分のあるがままを受け入れることができた時、私は変わっていくのです。私たちは、自分の現実の、そのあるがままの姿を十分に受け入れることができるまでは、決して変わることはできません。今の自分から変わることはないのです」。

私たちがイエス様のそばに座って、その話に聞き入っているとき、より自分らしい、あるがままの自分になることができるのです。これだけが、多くのことに思い悩んでいる私たちに、必要なことなのです。

★分級への展開

さんびしよう

*讚美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

5 1 番

1 2 3 番（改訂版）

やってみよう

その①

二人ずつ組んで、5分間ずつ、たとえば「頭をなでてほしい」、「膝枕をしたい」などと、おねだりしましょう。自分のあるがままの気持ちを受け入れてもらうことを、実際に経験してみましょう。

その②

- ・ 神さまのみことばを聞いた子どものサムエルのお話をしましょう。
※サムエル記 3:2-10、アーチブック「少年サムエル」
- ・ お話を聞いた後、サムエルはどんな子どもだったか、話してみましょう。
- ・ 教会のどこかにサムエルの絵があれば、みんなで「サムエル探し」しましょう。
絵がない場合は、古いカードやネットでサムエルのイラストをコピーして、どこかにひそかに貼ったり、隠したりして「サムエル探し」をしましょう。
- ・ 最後にしばらくの間、みんなで手をつなぎ目を閉じて、心を神さまに向けましょう。
リーダーは、しばらくの沈黙の後、静かに今日のみことばをゆっくり読みます。
再び、沈黙の後、お祈りをしましょう。

話してみよう

その①

- ・ あなたは、マルタとマリアのどちらに共感しますか。
- ・ イエス様のそばにいと信じて、自分の心の奥の声に耳を傾けてみましょう。
- ・ あるがままの自分と向き合ってみましょう。

その②

今日の聖書でイエス様は、私たちはどんなことよりも神様のお話を聞くこと、お祈りすることが大切だと言っています。自分にとって、大切なものはなんですか？考えてみましょう。

家族、友達、勉強、ゲーム、テレビ、お金、お祈りの七つを、自分が大切だと思う順番に並べ替えてください。

なぜそのように並べたか、お互いに話してみましょう。